

Working Paper Series in Young Scholar Training Program

Crying Situations and Internal States of Individuals with a High Crying Proneness

Yukiko Ishii

The University of Tokyo

April, 2021

No. 37

東京大学大学院教育学研究科附属 学校教育高度化・効果検証センター

Center for Advanced School Education and Evidence-Based Research
Graduate School of Education
The University of Tokyo

情動的落涙傾向が高い個人の泣き場面と内的状態

石井 悠紀子（東京大学）

Crying Situations and Internal States of Individuals with a High Crying Proneness

Yukiko Ishii

The University of Tokyo

Authors' Note

This research was supported by a grant, Young Scholar Training Program from Center for Advanced School Education and Evidence-Based Research (CASEER), Graduate School of Education, The University of Tokyo

Abstract

The purpose of this study was to elucidate the crying situations and internal states of individuals with a high crying proneness. Semi-structured interviews were conducted with 10 participants who were recruited from among those who easily shed tears in interpersonal situations. As a result, in addition to "loss," "separation," "empathic pain," and "conflict," which have been identified in previous studies, we identified new crying situations, such as "consultation with others," "presence of others," and "recovery of others," indicating the diversity of crying situations. In "presence of others" and "recovery of others," the existence of other-oriented crying in interpersonal situations other than art elicited tears was clarified. In addition, we examined the internal states of individuals with a high crying proneness when they cried, including the crying scene and the reactions of others. As a result, individuals who cried experienced negative emotions such as "I'm sorry for causing trouble," "I'm ashamed of myself for crying," and "I can't control my crying" in response to others' confusion and upset in the "conflict" scene. On the other hand, the "consultation with others" scene showed that, when others showed understanding to the individual who cried or treated the individual as usual without showing any upset, the individuals who cried experienced positive emotions, such as they felt a sense of relief and they were able to change their mind.

Keywords : tearful crying, crying proneness, emotional expressivity, internal state

情動的落涙傾向が高い個人の泣き場面と内的状態

1 問題と目的

自身の情動を表情，声，姿勢などを通して表出することを情動の表出という。情動の表出は，他者とのコミュニケーションにおいて重要であり (e.g., Burgin et al., 2012)，心身の健康や主観的幸福感を促進させる (e.g., Smyth, 1998)。嬉しい時や悲しい時に流れる情動性の涙も，情動の表出の一つである。情動性の涙は，先行研究 (Vingerhoets, 2013; Denckla et al., 2014; Wassiliwizky et al., 2017) に基づくと，以下の5つに区別できる：(1) 肉体的苦痛に関連した涙 (2) 身近な人が死んだときなど，個人的な喪失に関連した涙 (3) 共感的痛みに関連した涙。例えば，親しい人が困難に直面したとき (4) 社会的な涙。例えば儀式的な泣き (5) 芸術 (映画鑑賞も含まれる) によって引き起こされる涙。

芸術によって引き起こされる涙は，一般的に人が泣くことを避けようとしないうる唯一の場面である (Wassiliwizky et al., 2017)。芸術鑑賞で涙を流すことは，感受性の豊かさの反映として自他から肯定的に評価されるだろう。他方，芸術鑑賞以外の対人場面では，涙は発達とともに抑制しようと意識づけられていくため (橋本・澤田・松尾・武知, 2006)，臨床場面等を除き，大人が対人場面で泣くことは避けられる。また弱さや能力の低さなど否定的な自他評価とも結びつきやすい (e.g., van de Ven, Meijs, & Vingerhoets, 2017; Simons et al., 2013)。これらの知見から，対人場面で泣きやすい (以下「情動的落涙傾向が高い」) 個人は，泣きを制御できなかった結果として，他者の前で落涙することとなり，自他の評価によっては，不適応な帰結をもたらす可能性が想定される。しかし，情

動的落涙傾向が高い個人に焦点を当て，彼らが泣いている時に感じる欲求，情動，思考などの内的状態を精緻に検討した研究は筆者の知る限り未だない。彼らの内的状態を明らかにすることは，彼らの自己理解や他者の適切な理解を促進する上で重要だろう。

泣いた個人の内的状態に関する従来の研究では，涙のカタルシス効果やコーピング方略との関連を研究する目的で，泣いた後の気分が多く検証されてきた (e.g., Bylsma et al., 2011; Gross et al., 1994; Gračanin et al., 2014)。その中で，対人場面で泣いた後の気分は，場面の違いや他者の反応などの対人状況文脈の影響を受けることが先行研究で明らかになっている。Bylsma et al (2011) は調査協力者から日誌法によりデータ収集を行い，1004件の泣きエピソードを分析した。その結果，泣き場面として最も多かったのは争い・口論 (Conflict) で，争い・口論場面は泣いた後の気分の悪化と関連した (Bylsma et al., 2011)。他方，泣いた後の気分が良好であったのは，個人的な失敗や状況が改善された場合であった (Bylsma et al., 2011)。また Simons et al (2013)は，泣きの動機を質的に調査した。その結果，他者による自己の情動の理解や他者からのサポートを欲したときに，泣く者が多いことを示した。続く Gračanin et al (2016)は，Simons et al (2013)の結果を含め，泣くことが社会的に非難される場合には泣きは気分の悪化をもたらすが，泣きが社会的に非難されない場合や，他者からのサポートを引き出す場合には気分の改善に繋がると主張した。また Gračanin et al (2016)は，他者がいる場面で泣いた個人は泣いたことに対して恥ずかしさを感じ，それが泣いた後の気分の

改善を妨げると主張した。このように、対人場面で泣いた後の気分は、対人状況文脈の影響を受けることが指摘されている。しかし、従来の研究は、量的な調査やレビューに偏っているため、泣いた個人の内的状態について精緻に検討がなされていない。そのため、なぜ争い・口論場面では、泣いた後に気分の改善が促されないのか、他者のどのような反応や態度が、泣いた個人の気分の改善を妨げるのか、泣いた個人は泣いた自分をどのように認識しているのか、など詳細なことは未だ明らかにされていない。対人状況文脈を踏まえて泣いたときの内的状態を明らかにすることができれば、涙が気分の回復や改善を必ずしももたらすわけではないという知見 (e.g., Bylsma et al., 2011; 澤田・松尾・橋本, 2012) に対して一定の示唆を与えることができるだろう。

以上のことから、情動的落涙傾向が高い個人の泣き場面における内的状態を明らかにすることを本研究の目的とした。また情動的落涙傾向の高い個人に調査を行うことで、学術的には、これまで取り出されてこなかった多様な泣き場面を取り出すことが可能になる。泣き場面は非常に多様であるため、従来のカテゴリーには当てはまらない泣き場面が想定される。例えば、幸福感や喜びなどのポジティブな情動を伴う泣きは、芸術や音楽鑑賞場面に留まっているが(e.g., Denckla et al., 2014; Wassiliwizky et al., 2017), 対人場面におけるポジティブ情動を含んだ泣きも複数想定し得るだろう。そこで本研究では、対人状況文脈に着目して、情動的落涙傾向の高い個人を対象に、泣き場面及び彼らの内的状態を明らかにすることを目的とした。

2 方法

2.1 調査協力者

大学生及び社会人の 10 名 (男性 1 名, 女性 9 名,

平均年齢 30.3 歳) であった。著者及び心理系の研究協力者を募集するソーシャル・ネットワーキング・サービスを使用して「対人場面で泣きやすい人」を対象に協力者を募った。インフォームドコンセントを得た後、同意した者に対してインタビューを行った。参加者には 1500 円の謝金を支払った。本研究は東京大学倫理審査委員会の承認を得て実施された (No20-229)。

2.2 調査期間, データ収集

調査期間は 2020 年 12 月である。データ収集は半構造化インタビューで、1 対 1 で 1 人の参加者に対して 1 回実施した。調査はオンライン上 (Zoom) で行い、1 回あたりのインタビューは 45 分～60 分であった。

2.3 調査内容

「一人ではなく、他者がいた場面で泣いたことについてお答えください。どのようなときに泣きやすいか、具体的なエピソードを教えてください」と述べ、以下の内容でインタビューを行った。

1. ○○さんはどのような気持ちでしたか (内的状態)
2. 泣くことを我慢しようと思いましたが (内的状態; 泣きの制御)
3. 周囲の人はどのような人がいましたか (他者との関係性)
4. 周囲の人は、どのような反応していましたか (他者の反応)
5. それに対して、○○さんはどのように感じましたか (他者の反応を受けた後の内的状態)

2.4 分析方法

分析にはテーマティック・アナリシス法のハイブリッドアプローチ (Boyatzis, 1998)を用いた。

録音した内容から逐語録を作成し、意味段落ごとにコーディングを行い、コードブックに記録した。コードブックには、コード名、定義、逐語録の該当箇所を記入した。また取り入れ条件（どのような条件でコードを適用するか）と除外条件（どのような条件でコードを適用しないのか）も明記した。

泣きの先行研究（Denckla et al.,2014; Vingerhoet et al., 2013, Wassiliwizky et al., 2017)の4つの要素「喪失(loss)」「分離(separation)」「共感的痛み(empathic pain)」「争い・口論」に、該当するコードをトップダウンに割り振った。先行研究に該当しないコードは、新たにカテゴリーを作成し追加した。カテゴリー内の発話が複数集まった時点で、発話をボトムアップでサブカテゴリーに纏めた。

3 結果と考察

7つの泣き場面が得られた。それらは「喪失」, 「分離」, 「共感的痛み」, 「争い・口論」, 「他者への相談」, 「他者の存在」, 「他者の回復」であった。

まず、場面ごとに泣いているときの内的状態(情動・思考)に関する発話をまとめた(3.1)。次に、泣いた場面及び泣きに対する他者の反応を考慮して、泣いた個人の泣いた後の内的状態(泣いた自己をどのように捉えているか)に関する発話をまとめた(3.2)。

3.1 泣いたときの内的状態

ここでは、場面ごとに、泣いたときの情動や思考などの内的状態に関する発話を纏めた。

3.1.1 喪失

先行研究と同様、喪失に関する発話を得られた。具体的な発話を以下に示す。2つの発話は同じJ

さんの喪失体験であるが、祖父との死別場面では泣きを抑制したのに対して、友人との死別場面では泣きを抑制しなかった。この違いは、故人の身近な人(両親)を支えなければならない立場にあったか否かという点が関連していると推測される。

J: 亡くなったのが祖父なんですけど、僕よりも両親の方がおそらく辛い気持ちを持っていると思うので、僕がここで泣いてしまうとちょっと暗い感じになっちゃうんじゃないかっていうふうに思って、僕はいつも通りいた方がいいのかなというふうに、家族の前ではそういうの(涙)は出さないようにしてました (J40)

J: お葬式に行って、みんな(友人・自分)ショックを受けて泣いてましたね(中略)6年間の友人だったんで。部活の同期だったんですけど、高校の3年間一緒にがんばってきたこととかを思い出して、もっと色々彼にできたんじゃないかとか、もっと会ってけばよかったとかそういう後悔と思い出が合わさって、非常に悲しい気持ちになりました (J44)

3.1.2 分離

先行研究と同様、分離に関する発話を得られた。分離には、送別会・部活の引退・失恋の出来事が含まれた。例として、Cさんの送別会場面を挙げる。

C: 先輩とか、職場で誰かが辞めちゃうとかで一番泣いてます(中略)今までずっと一緒にやってきた人が明日からいなくなっちゃうのは、部活の先輩とか職場の人はそういうふうに思って、悲しいです (C22)。

3.1.3 共感的痛み

先行研究と同様、共感的痛みに関する発話が得られた。臨床心理士をしながら大学でゼミをもっているIさんは、泣くことを自分に許可した。

I: (大学のゼミで学生が他者と) お別れをしたんだっていう話をしているときにはもう泣いちゃって、Zoom(オンライン)ですけど、学生さんの前で泣いてしまってまあいいやと思って、そのまま泣いたっていうのを見せながら授業したっていうこともあって、じゃあまた〇〇先生泣いてるみたいなの、初めてじゃないみたいなの感じなので、あの年齢と共に涙もろくなるっていうのもあると思うんですね。もう若い時から割と泣くの我慢しようと、その努力がなくなってきたというか(I6)

他方Iさんはカウンセリングの場での他者への共感的な痛みに関する泣きに関しては、泣きを抑制すると語った。

I: カウンセリング場面の時は私が泣いてしまったり、クライアントの方が情動を抑えてしまったり、言うのを我慢してしまったりするので大変申し訳ないので、できるだけそれはバルブを閉めるようにして。そうは言ってもあのちょっとこう人がやっぱり亡くなった場面とかあまりにも恐ろしい体験をされた方とか結構涙ながらに話したりするところも仕事でやらなきゃいけないことがいっぱいあるので、じっくり泣くって感じじゃないんだけどちょっと涙滲むということはあって (I12)

3.1.4 争い・口論

先行研究 (Bylsma et al., 2011) と同様、本カテ

ゴリーは、最も発話者が多かった。またカテゴリーには、双方が対立している状態だけでなく、一方的に他者(目上の立場にいる者)から指摘を受けた状況や、自身は争い・口論に参加していないが、そのような場面に遭遇して泣いた出来事(Dさん)を含んでいる。本カテゴリーは(i)他者からの否定・拒否、(ii)自分自身の否定、(iii)他者からの否定・拒否の予期の3つのサブカテゴリーが含まれる。

(i) 他者からの否定・拒否

本サブカテゴリーは、無力感や悔しさと結びついていた。他者からの否定・拒否による状態自尊情動の低下(e.g., 阿部・今野, 2007)が、争い・口論場面での泣き開始時から泣いた後に至る否定的な情動経験と結びつくと推測される。

B: 喧嘩になったときに、喧嘩だから相手が自分のこと否定してくるというか結構言ってくるタイプの人で(中略)もともとその話すとか伝えるとか、説明するみたいのがあんまり得意じゃないと思ってるんですけど、それでも頑張って伝えようとしているのに聞いてすらもらえないみたいな、無力感みたいなのもあって、もうそこから後が言葉になってくれないみたいなイメージです (B19, 36)

I: 人前だったんですけどそれ、同僚の前でこれできてないじゃないと厳しく言われて、まあ今はそんなことやったらパワハラって言われちゃうのかもしれませんがね昔はわりと人前で皆の前でディスカッションして、これできてないじゃないあれできてないじゃないここもだめじゃないとかって言われ続けるっていうなんかスパルタ教育があって、あまりにもできてないふ

がいなさに悔しいし、一部私のせいではないことも私のせいのように言われたのもあって、それも悔しかったですし、出来てない自分も何か悔しくてダーッと泣いたっていうのがね (I45)

G: これってどうしたらいいんでしょうかみたいな、まあ聞き方もあんまりな良くなかったんですけど、言いに行ったら、いやそれ前教えたよね、だけ返されてどわあってなりました (中略) 前ってどれだろうと思って、もうわかんないし多分これ至急で何かしなくちゃいけないけどこの人に頼れないしどうしようってなりました (G87, 89)

またこれらの発話は、他者に言い返せないというエピソードとともに語られることも多かった。発話者の相手は、目上の者（上司や親）であることが多く、目上の者に対する反抗は、否定的に捉えられることが想定されるため、反論できないまま、泣くに至ったと考えられる。こうした泣きの理由は、欧米諸国の従来の調査研究（e.g., Simons et al., 2013）では見当たらないため、日本文化で顕著な可能性がある。

B: 言い返したいけど、でもうまく言葉にならないっていう時が結構自分の中で、言葉が涙に代わるじゃないですけど泣きやすい、ふとでてきちゃうみたいなのが、結構多いかなと思ってます (B12)

(ii)自分自身の否定

本サブカテゴリーは、争い・口論の中で、自分自身を責めている者の語りが含まれた。これは Choti et al (1987)の自己非難 (self-blame)が情動

的落涙傾向と正に関連しているという知見と一致している。

J: ケンカするときに、これが悪いだろとかいう風に一方的に言うんじゃなくて、話し合う感じで解決を図っていたんで、その話し合いをする時に、自分ってこういうところが悪いんだなっていうふうに思って自分を責めちゃって泣くっていうことがあった (J146)

D: (他者が他者に対して怒っているのを見て) ちょっと深いところまで考えすぎてしまって、自分も悪かったのかなみたいな形でちょっと人前で泣かないようにはしてるんですけどもちょっと 自分の責任を感じてしまいます (D12, 14, 96)

(iii)他者からの否定・拒否の予期

本カテゴリーには、実際に否定・拒否されていない場合でも、否定されることを“予期”することで、泣きが誘発される可能性を示唆している。

H (話し合いの場で) 自分の意見を否定されるのが怖くっていうのを躊躇っているんですよ多分心の内どこかで。でも同じくらいかそれを超えるほどに伝えたいし話したいっていう気持ちの方が強くて、結局、話している内に泣いてしまっているんですけど (H41, 61)

また他者からの否定や拒否の予期においても、以下の発話から見られるように、状態自尊情動の低下と関連していることが推測される。

H: 劣等感を自分で抱いていて、あんまり上手じゃないのに立候補しちゃって。それでみんなに練習で迷惑をかけてるなって思っている中で、でも頑張ろうと思っていたんですけど、練習し

ない人はいるわ、多分私にそのいつまでも伴走が完成しないから白々しい目を向けてる人はいるわとか、申し訳なさが自分の不甲斐なさとか、自分は練習に協力してもらいたいけど自分がそんなこと言える立場ではないなとかそういうことを思っていたんだと思います (H115)

3.1.5 他者への相談

本カテゴリーは、争い・口論の次に発話者が多かった。相談内容には、職場内トラブルなどが含まれた。このカテゴリーには、つらい過去を想起して泣くことや、他者の共感や理解によって泣くことが含まれる。

A: 時系列であったこととかを話すとその時のスゴイ嫌だったのが自分の中であって、もう泣いてるっていうより涙止まらないって感じになってしまう(中略) お仕事だし処理しなきゃって思ってたところに、その大変だよねあれは辛いよねっていうその共感してもらうことによって、何か緩むというか、そうなんですって言い始めたらもう涙が止まらないっていうような感じ (A10)

G: 自分がつらいと思ってたことをあんまりなんか具体的に多分落とし込めてない状態で、でもいっばいつもってつもってつどわってなるんですけど、だけどその後で、こういうこともあったよねみたいなこと言われると、あっ確かにあったみたいになって、もう一回多分辛さがこみ上げてくるし、そこになんだろ普通だったら多分耐えられてた、そのつらさも耐えられたんだけどそれを理解してくれてる人がいる、いたっていうことに、なんか一人じゃなかったっていうことの安心なのかな、なんか急にたがが外れちゃうというか (G148)

従来の研究では、泣くことは回復プロセスの一部であり、“苦痛からの解放”であると想定されている (e.g., Efran & Spangler, 1979; Sharman, Dingle, Vingerhoets, & Vanman., 2019; Vingerhoets, Boelhouwe, Tilburg, & Heck, 2001; Vingerhoets, Bylsma, & Rottenberg, 2009)。本研究から得られた発話は、過去の想起や自己の苦しみの気づきによる“苦痛”の経験と、他者の共感や理解によりもたらされた“解放”の経験過程であると推測される。

また神経生理学的には、泣くことは身体の覚醒状態を反映する交感神経活動と、身体のリラックス状態を反映する副交感神経活動が同時に活性化している状態であると想定されている (Bylsma et al., 2019)。したがって、つらい過去の想起や自己の苦しみの気づきによってもたらされる身体的な覚醒(交感神経活動の増加)と他者の慰めによってもたらされる安堵(副交感神経活動の増加)が同時に起こることで、涙が誘発された可能性がある。

3.1.6 他者の回復

本カテゴリーの「他者の回復(3.1.6)」と、続く「他者の存在(3.1.7)」の2つのカテゴリーは、他者に対する肯定的な情動が主に喚起されていた点で、否定的な情動が主に喚起されていた場面である「共感的痛み(3.1.3)」とは異なる。また「他者の回復」は他者の苦痛が前提にあるが、「他者の存在」は他者の苦痛が前提にあるとは限らず、肯定的な情動にのみ焦点が当てられていたため両者を区分した。

臨床心理士であるIさんは他者(クライアント)の回復を感じて、泣くと語った。

I: 患者さんとかクライアントさんと話していて泣く時って、そうですね辛くても泣くっていうより、最近は何んて言うんですかね、クライアントさんが頑張って乗り越えかかっている時に泣けることが多いのかも知れませんね。(中略) 殺されそうになった場面とかレイプされそうになった場面を何度も何度も聞くので、その話を聞いて涙がでるかかっていうとそうじゃないんですよ。そこから何度も治療を続けて良くなった時に泣きやすいんですよ。よくなったなーって自覚し始めたとき、クライアントさんか自覚し始めた時って、ほんと私変わりましたよねみたいな時にウルッてきちゃうんですよ (I83)。

「他者への相談」と同様に従来の研究では、泣くことは回復プロセスの一部であり、“苦痛からの解放”であると想定されている (e.g., Vingerhoets, Bylsma, & Rottenberg, 2009)。本カテゴリーは、クライアントが苦痛から解放される状態に、発話者が共感している状態であると推測される。加えて、他者指向的な希望 (other-oriented hope) がこうした状態における泣きの生起の個人差を説明している可能性がある。他者指向的な希望とは、他人の利益を目的とした希望を指し、自分自身の利益を目的とした希望 (自己指向的な希望) とは理論的に区分されている (e.g., Howell & Buro, 2017)。他者指向的な希望を高く有している個人は、他者の回復場面で泣きを生起しやすいことが想定される。加えて、発話者が、臨床心理士であったことから、自己の職業的な達成が泣きの誘発に影響を及ぼしたことも推測される。

3.1.7 他者 (赤ちゃん) の存在

またIさんは、赤ちゃんを見て泣くと語った。本カテゴリーは、芸術学などで扱われる美

的感情や審美的感情 (e.g., 戸梶, 2001; Marković, 2012) の生起によってもたらされる涙に近い可能性がある。

I: (赤ちゃんを見て泣くことは) 美術品と似てますよね, 芸術品と似てますよね。あまりにも幼いものが生きてて、家族に愛されている、その愛されている雰囲気とかで泣いちゃいますね。そのあまりにも幼い人間が動いて生きてるっていうことにも感動します (I96)

3.2 泣いた個人に対する他者の反応と 泣いた個人の内的状態

ここでは、泣いた個人と他者との相互作用が多かった「争い・口論」及び「他者への相談」場面に着目して、泣いた個人から見た他者の反応と、泣いた個人の内的状態 (泣いた自己をどのように認識しているか) を示した (図1)。

「争い・口論」場面では、泣いたことに対する他者の驚き、困惑、攻撃または冷たい態度などと結びつき、結果として、泣いた個人の否定的な情動経験と結びつくことが多かった。泣くことで相手を困惑させたり、気遣いをさせてしまったりしたことに対する申し訳なさや「泣きたくて泣いているわけではない」という泣きの制御困難さ、あるいは泣いたことに対する恥ずかしさなどが否定的な情動経験に含まれた。

B: 上司とかとの関わりだと、別に泣いても変わらないみたいな反応ですね。元彼は、最初は泣いてることに若干びっくりしてたんですけど、もう後半になってくるとまたそうやって泣くんでしょみたいな感じでしたね。泣けばいいと思ってるじゃないんですけど、また泣いてるよみたいな (これに対して〇〇さんはどういふうに感じましたか?) こっちだっけ泣きたく

て泣いてるんじゃないんだよって心の中で思っ
てます (B40, 42)

G: 泣いてるって認識されているなって分かった
瞬間にはもう申し訳ないなって思います。気を
使い始める顔してるって思ったときごめんなさ
いって思います (G158)

I: 心の中では泣いちゃ恥ずかしいからもう泣か
ないと思っているんだと思うんですよその時
は。こっ恥ずかしいから泣くのやめとこうって
泣いてる暇ないし、なんでここができてないん
だからちゃんと考えなきゃと思うんですけど
(I58)

一方で「他者への相談」場面では、他者が泣いた個人に対して理解を示したり、困惑や動揺等を示さず普段と変わらず接する場合には、他者に対する安心感や信頼感が形成されたり、気持ちの切り替えが素早く行われたりした。他者が泣いた個人に対して普段通りに接することで、他者に対する申し訳なさや恥ずかしさなどを感じることなく、気持ちの切り替えが素早くできるようになったと考えられる。

A: 信頼感というか、この人たちは大丈夫という
か、安心感があります。泣いたからどうこうみ
たいな形でケアをされるよりは、泣いてほうが
泣いてまいがいつもと変わらず、こうした方が
いいんじゃないかとか、それは大変だったから
これはちゃんとここに連絡した方がいいんじ
ゃないかとか、まあ一通り話を聞いた後にそう
いう提案をしてくださったり、いつもと変わら
ないスタイルっていうか (A28)

D: 大げさに捉えられず、かと言って無視をされ
ているわけでもないので普通に接してもらった

ほうが私も泣きやんだらすぐ気持ちも切り替わ
ったりするのでいいなあと思います
(D130, 132)

4 総合考察

本研究の目的は、情動的落涙傾向が高い個人の泣き場面と内的状態を明らかにすることであった。その結果、従来の研究で明らかにされてきた「喪失」「分離」「共感的痛み」「争い・口論」に加えて「他者への相談」、「他者の存在」、「他者の回復」という新たな泣き場面を明らかにし、泣き場面の多様さを示した。特に「他者の存在」「他者の回復」において、芸術鑑賞以外での対人場面における、他者指向的で肯定的な泣きの存在を明らかにした。次に、情動的落涙傾向が高い個人の内的状態を、泣き場面と他者の反応を含めて検討した。その結果「争い・口論」場面における他者の困惑や動揺は、彼らに迷惑をかけることに対する申し訳なさ、泣いたことに対する恥ずかしさ、泣きの制御困難さなどと結びつくため、泣いた個人の否定的な情動経験と結びついた。一方で「他者への相談」場面では、他者が泣いた個人に理解を示す場合や、動揺などを示さず普段通りに接する場合には、泣いた個人は安心したり、気持ちを切り替えたりすることができるなど、肯定的な情動を経験することが明らかになった。本研究は(1)従来のカテゴリーには含まれていない泣き場面を明らかにした点、(2)泣き場面や他者の反応に焦点を当て、泣いた個人の内的状態を明らかにした点で新規性があると考えられる。

一方で、本研究のサンプルは、情動的落涙傾向が高い個人のみを対象としているため、結果の一般化には留意する必要がある。例えば、Lutjens(1998)は、情動的落涙傾向が低い妊婦女性

が涙を流した際に、夫婦間のアタッチメント（愛着）が効果的に促進されたことを示した。言い換えれば、情動的落涙傾向が高い個人は、他者からのアタッチメントやサポートが効果的に引き出されない可能性があり、それにより泣いたときに否定的な情動を経験しやすい可能性がある。今後の研究では、情動的落涙傾向の個人差も考慮しながら、泣いた個人の内的状態について調査することが望まれるだろう。

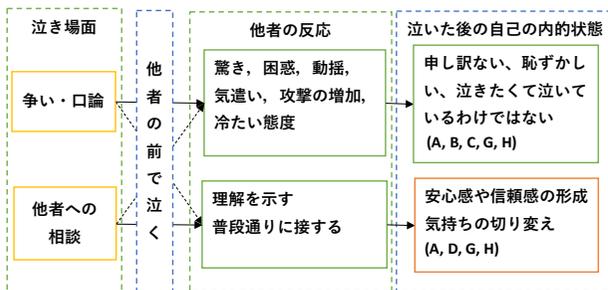


図1 「争い・口論」及び「他者への相談」場面における他者の反応及び泣いた後の内的状態

注 発話数が多かった流れを黒線の矢印、発話数が少なかった流れを破線の矢印で示した

引用文献

Boyatzis, R. E. (1998). *Transforming qualitative information: Thematic analysis and code development*. sage.

Burgin, C. J., Brown, L. H., Royal, A., Silvia, P. J., Barrantes-Vidal, N., & Kwapil, T. R. (2012). Being with others and feeling happy: Emotional expressivity in everyday life. *Personality and Individual Differences, 53*(3), 185-190.

Bylsma, L. M., Croon, M. A., Vingerhoets, A. J., & Rottenberg, J. (2011). When and for whom does crying improve mood? A daily diary study of 1004 crying episodes. *Journal of Research in Personality, 45*(4), 385-392.

Bylsma, L. M., Gračanin, A., & Vingerhoets, A. J. (2019). The neurobiology of human crying. *Clinical Autonomic Research, 29*(1), 63-73.

Choti, S. E., Marston, A. R., Holston, S. G., & Hart, J. T. (1987). Gender and personality variables in film-induced sadness and crying. *Journal of Social and Clinical Psychology, 5*(4), 535-544.

Denckla, C. A., Fiori, K. L., and Vingerhoets, A. J. J. M. (2014). Development of the crying proneness scale: associations among crying proneness, empathy, attachment, and age. *J. Pers. Assess.* 96, 619-631.

Efran, J. S., & Spangler, T. J. (1979). Why grown-ups cry: A two-factor theory and evidence from The Miracle Worker. *Motivation and Emotion, 3*(1), 63-72.

Gračanin, A., Bylsma, L. M., & Vingerhoets, A. J. (2014). Is crying a self-soothing behavior?. *Frontiers in Psychology, 5*, 502.

Gračanin, A., Bylsma, L. M., & Vingerhoets, A. J. (2018). Why only humans shed emotional tears. *Human Nature, 29*(2), 104-133.

Gross, J. J., Fredrickson, B. L., & Levenson, R. W. (1994). The psychophysiology of crying. *Psychophysiology, 31*(5), 460-468.

Howell, A. J., & Buro, K. (2017). Other-oriented hope: Initial evidence of its nomological net. *Personality and Individual Differences, 106*, 104-110.

Lutjens, C. (1998). Mood and crying during pregnancy and postpartum: A pilot study. Masters thesis, University of Tilburg, Tilburg, Netherlands.

Marković, S. (2012). Components of aesthetic

- experience: aesthetic fascination, aesthetic appraisal, and aesthetic emotion. *i-Perception*, 3(1), 1-17.
- Sharman, L. S., Dingle, G. A., Vingerhoets, A. J., & Vanman, E. J. (2019). Using crying to cope: Physiological responses to stress following tears of sadness. *Emotion*.
- Simons, G., Bruder, M., van der Löwe, I., & Parkinson, B. (2013). Why try (not) to cry: intra- and inter-personal motives for crying regulation. *Frontiers in psychology*, 3, 597.
- Smyth, J. M. (1998). Written emotional expression: effect sizes, outcome types, and moderating variables. *Journal of consulting and clinical psychology*, 66(1), 174.
- Vingerhoets, A. J. J. M. (2013). *Why Only Humans Weep: Unraveling the Mysteries of Tears*. Oxford: Oxford University Press.
- Vingerhoets, A. J. J. M., Boelhouwer, A. J. W., van Tilburg, M. A. L., & van Heck, G. L. (2001). The situational and emotional context of adult crying. In A. J. J. M. Vingerhoets, & R. R. Cornelius (Eds.), *Adult crying. A biopsychosocial approach* (pp. 71-90). Brunner-Routledge.
- Vingerhoets, A. J. J. M., Bylsma, L., & Rottenberg, J. (2009). Crying: A biopsychosocial phenomenon. In T. Fogen (Ed.), *Tears in the Graeco-Roman world* (pp. 439-475). de Guyter.
- Wassiliwizky, E., Jacobsen, T., Heinrich, J., Schneiderbauer, M., & Menninghaus, W. (2017). Tears falling on goosebumps: Co-occurrence of emotional lacrimation and emotional piloerection indicates a psychophysiological climax in emotional arousal. *Frontiers in Psychology*, 8, 41.
- van de Ven, N., Meijs, M. H., & Vingerhoets, A. (2017). What emotional tears convey: Tearful individuals are seen as warmer, but also as less competent. *British Journal of Social Psychology*, 56(1), 146-160.
- 阿部美帆, & 今野裕之. (2007). 状態自尊情動尺度の開発. *パーソナリティ研究*, 16(1), 36-46.
- 橋本巖, 澤田忠幸, 松尾浩一郎, & 武知幸恵. (2006). 青年における泣きの対人的表出制御と関連要因の検討: 「ひとりになって泣くこと」と「人前で泣くこと」, *愛媛大学教育学部紀要*, 53, 45-55
- 戸梶亜紀彦. (2001). 『感動』喚起のメカニズムについて. *認知科学*, 8(4), 360-368.
- 澤田忠幸, 松尾浩一郎, & 橋本巖. (2012). 成人期における“泣くこと”による心理的变化. *心理学研究*, 82(6), 514-522.

Copyright © 2010-2021 Center for Advanced School Education and Evidence-Based Research

Graduate School of Education, The University of Tokyo

東京大学大学院教育学研究科附属学校教育高度化・効果検証センター

Center for Advanced School Education and Evidence-Based Research,

Graduate School of Education, The University of Tokyo

WEBSITE (日本語) : <http://www.schoolexcellence.p.u-tokyo.ac.jp/>

WEBSITE (English) : <http://www.schoolexcellence.p.u-tokyo.ac.jp/en/>

